

ハドソン川を上って

— 19世紀アメリカにおけるツーリズムの展開と文化運動 —

増 永 俊 一

1. ヤング・アメリカ

アメリカという国家の特質としてしばしば指摘されることのひとつに、若く歴史の浅い国家ということがある。しかし、その急激な国力増大の過程を見れば、アメリカの歴史は短くはあっても決して希薄ではなく、むしろ濃密である。19世紀半ばに展開した「ヤング・アメリカ」運動（Young America Movement）は、その若さを国家発展の原動力とするものであったが、この言葉をスローガンとして、アメリカは急速に、時には暴力的にその領土と人口を拡大していく。そして、理想の国家を打ち立てようとする若々しい希望は、様々な社会改良運動の展開をも惹起した。19世紀アメリカとは、国を二分する内戦であった南北戦争の勃発をも含め、極めて濃厚な史実が折り重ねられていった世紀であったと言えるだろう。

周知の通りアメリカ合衆国はイギリスの植民地としてその歩みを始めたが、西欧列強による大航海時代の植民地獲得競争においてイギリスは最後発である。16世紀末、イギリスは手始めに、1585年と1587年の2度にわたって現在のノースカロライナ州沿岸部にあるロアノーク島において植民地の建設を試みたが、ロアノーク植民地¹⁾は植民者全員が忽然と姿を消したことで今も様々な憶測を呼んでいる「消

1) Roanoke Colony 植民事業は、イギリスの廷臣、探検家、作家であった Sir Walter Raleigh (1552/1554-1618) が出資者であった。彼はエリザベス一世に重用された家臣であったが、この

えた植民地」(Lost Colony)であり、その植民事業は失敗に終わる。イギリスの恒久的な植民地が誕生するのはようやく17世紀になってからのことで、1607年入植のヴァージニア植民地(The Colony of Virginia)が北米初のイギリス植民地である。以後、続々とイギリス植民地は建設され、13植民地の最後となるジョージア植民地(The Province of Georgia)開設は世紀を跨いだ1733年のことであった。

そして、1776年7月4日に『独立宣言』(*The Unanimous Declaration of the Thirteen United States*)が公布されるのであるが、それはあくまで一方的な「宣言」であって独立の達成を意味するものではなかった。アメリカが独立国家として世界から承認されたのは1783年のパリ条約によってであったが、程なく第2次独立戦争とも呼ばれる「米英戦争」(The War of 1812)が勃発する。そして、1814年の終結を以てアメリカは「政治的」にだけでなく、「経済的」にもイギリスからの独立を達成したとされている。従って、アメリカが近代国家として真の独立を果たしたのは米英戦争終結後の19世紀になってからのことだとも言える。先述の「ヤング・アメリカ」運動とは、アメリカの独立国家としての地位をより確かなものにしようとするナショナリズム運動であった。そして、いまだアメリカが達成していない「独立」が模索されてゆく。それは、ヨーロッパからの「文化的」な独立であった。

Washington Irving (1783-1859)は、アメリカがそういった文化的独立を志向する黎明期に登場した19世紀前半のアメリカを代表する作家である。しかし、アメリカがヨーロッパへの文化的依存から脱却することはそれほど容易なことではなかった。アーヴィング自身もアメリカの歴史と文化的蓄積の希薄さを強く意識し、ヨーロッパへの憧憬の念を隠そうとはしない。*The Sketch Book of Geoffrey Crayon, Gent.* (1819-1820)は、34編のエッセイや短編小説からなるアーヴィングの代表作であるが、そのうちの一篇である「私自身のこと」("The Author's Account of Himself")で、ヨーロッパについて次のように語っている。

But Europe held forth the charms of storied and poetical association. There
植民事業は失敗に終わる。現在のノースカロライナ州都 Raleigh は、彼の名前に因んでいる。

were to be seen the masterpieces of art, the refinements of highly cultivated society, the quaint peculiarities of ancient and local custom. *My native country was full of youthful promise; Europe was rich in the accumulated treasures of age.* Her very ruins told the history of times gone by, and every mouldering stone was a chronicle. I longed to wander over the scenes of renowned achievement—to tread as it were in the footsteps of antiquity—to loiter about the ruined castle—to meditate on the falling tower—to escape in short, from the commonplace realities of the present, and *lose myself among the shadowy grandeurs of the past.*

(Italics mine, 744)

対比されているのは、アメリカの「若さ」とヨーロッパの「成熟」である。アメリカには名作絵画はなく、洗練された社交界は存在せず、また詩情をそそる廃墟もない。このヨーロッパ礼讃は、アメリカが無い無い尽くしの新興国だと言っているに等しい。アーヴィングは、そのような母国を離れてヨーロッパに渡り、相当の期間をそこで過ごすことになった。当初はイギリスで貿易商を営む兄を助けるという事情があったものの、結局 1815 年から 1832 年の 17 年もの間、アーヴィングはヨーロッパに暮らした。『スケッチ・ブック』を彼が執筆したのも、母国アメリカではなくイギリスにおいてである。さらに、同書が「スケッチ」として収載しているものも、その大半がイギリスの風習や名所旧跡の紹介²⁾である。それでも、アーヴィングが 19 世紀初頭のアメリカを代表する職業作家³⁾と見なされているのは、“The

2) 『スケッチ・ブック』を構成する 34 編のうち間接的にアメリカに言及する “English Writers on America” などを除けば、短編小説の “Rip Van Winkle” と “The Legend of Sleepy Hollow”、エッセイの “Traits of Indian Character” および “Philip of Pokanoket” の 4 編が、アメリカに関連するものである。『スケッチ・ブック』は、その大半がイギリスに関するものであり、当時のアメリカ人のイギリスに対する強い関心に応えるものであった。

3) アーヴィングは、作品執筆だけで生計を立てることが出来たアメリカで最初の職業作家であった (Jones ix)。彼は職業としての文筆業に極めて意識的な作家で、『スケッチ・ブック』をイギリスとアメリカの両方で出版し、読者獲得と著作権の確保に余念がなかった (Jones 177-185)。

Legend of Sleepy Hollow”と“Rip Van Winkle”という『スケッチ・ブック』がわずかに収載するアメリカものの短編小説によって、アメリカの文学的独自性を示して見せたからである。そして、「リップ・ヴァン・ウィンクル」は19世紀前半のアメリカを代表する作品として認知され、世界に広まっていった。

2. 「リップ・ヴァン・ウィンクル」

「リップ・ヴァン・ウィンクル」は、もともとは“Peter Klaus”というドイツの民話を下敷きにした物語だとされている (Scudder 5-6)。しかし、ヒントを得たというレベルを超えていると揶揄する向きもなくはない。「いなくなった山羊を探しに森に入ると、そこでゲームに興じる不思議な人々に遭遇し、彼らのワインを飲んで眠りこみ、目が覚めると20年の月日が流れていた」という“Peter Klaus”の物語と、「リップ・ヴァン・ウィンクル」の筋書きはたしかに酷似している。妻の小言に嫌気がさして、愛犬ウルフと共にキャツキル山脈の山奥深くに入ってしまったリップは、そこでナインピンズというゲームを楽しんでいる見慣れない老人たちに遭遇し、彼らの酒を飲んで眠り込み、ほんの一眠りだと思っていたら何と20年もの月日が経過していた。リップが山に出掛けた動機が現実からの逃避であり、飲んだ酒はワインでなくオランダ酒であったという些細な違いはあるものの、一連の成り行きは表面上ドイツ民話とほとんど変わらない。しかも、目が覚めたのが20年後というその年数までぴったり一致するに至っては、剽窃行為にも等しいと指摘されるのかも知れない。しかし、「リップ・ヴァン・ウィンクル」は単にドイツ民話を焼き直したものではない。異界に入りある種のタイム・トラベルを体験するという非日常性、あるいはロマンス性において両者は共通するが、山中での不思議な体験のあと村に舞い戻ったリップが直面するのは、そこがもはやイギリス植民地ではなく独立を果たした国家アメリカであるという、すぐれて政治的なアメリカの物語でもあるのだ。

村に戻ったリップが目にするのは、ありとあらゆる変化である。誰ひとり顔見知

りがいないということだけではない。リップは途方に暮れて行きつけの宿屋に行ってみるが、宿屋の軒下のいつもの見慣れたジョージ国王の肖像が描かれた看板が、「ワシントン将軍」と記された見知らぬ人物の肖像画に変わっている。宿の前には星と縞模様の奇妙な組み合わせの旗が翻っている。言うまでもなく、星条旗である。さらに、村人に連邦党か民主党と問われその意味も分からず、「王の忠実なる臣民です」(“I am…a loyal subject of the King,” 780)と答えると、「王党派だ、スパイだ、亡命者だ！」(“a tory! a tory! a spy! a Refugee!” *ibid.*)と大騒ぎになる。そして、やっとのことで「革命戦争があったこと、この国が昔の英国の支配を脱したこと、自分はジョージ三世陛下の臣民ではなく、今は合衆国の自由な市民であること」⁴⁾をリップは理解するに至る。

アーヴィングがリップの不思議な経験を通して早回しで読者に提示して見せるのは、アメリカ誕生の寓話である。一連の目に映る変化に加えて、この物語にはアメリカをめぐる政治的寓意も織り込まれている。リップをやり込める妻は宗主国イギリスを体現し、夜ごと寝室説法(“curtain lecture,” 770)に苛まれるリップは、本国からの度重なる課税に音を上げる植民地だというメタフォリカルな読み方もこの物語は許容する。村に戻ったリップが何よりも安堵したのは、「かかあ天下」(“petticoat government,” 783)という「専制政治」(“despotism,” *ibid.*)が既に終わっていたことだが、それらの語彙も寓意的な意図を忍ばせる。そして、たった1晩のうちに20年が経過していたという筋書きも、それほどまでに時代の変化が激しかったという更なる寓意でもあり得る。

さらにこの物語を紛れもなく「アメリカ」の物語としているのは、その舞台である。この独立神話⁵⁾は架空の地で展開しているわけではなく、ハドソン川流域とキャ

4) “How that there had been a revolutionary war—that the country had thrown off the yoke of old England—and that, instead of being a subject of his Majesty George the Third, he was now a free citizen of the United States,” *Italics mine*, 783.

5) リップは最後には「独立戦争前」の古い時代の年代記(“a chronicle of the old times ‘before the war,’” 783)として村人から崇められることになるのだが、彼が自らの不思議な体験の語り部となって繰り返し人々に語り聞かせていくさまは、アメリカ誕生の経緯を神話化する行為だとも言える。

ツキル山脈という実在の場所で繰り広げられている。アーヴィングはニューヨーク出身の作家で、最初にハドソン川を上りその場所に魅せられたのは早くも少年時代⁶⁾のことであったとのちに述懐しているが (PMI vol.3 53)、大都市ニューヨークの読者にとってもそこは馴染みのある場所であった。「リップ・ヴァン・ウィンクル」が出版された1819年頃、ハドソン川流域は19世紀前半のアメリカで発生した顕著な文化現象であったツーリズムが展開した場所でもあった。小説「リップ・ヴァン・ウィンクル」の舞台のハドソン渓谷一帯は、ニューヨークの読者にとって人気の観光地として身近な場所であったのだ。

3. 19世紀前半のアメリカにおけるツーリズムの展開

「リップ・ヴァン・ウィンクル」冒頭の断り書きに続く本編は、まず舞台であるハドソン川流域とキャツキル山脈の美しい風景描写から物語を始めている。

WHOEVER has made a voyage up the Hudson must remember the Kaatskill mountains. They are a dismembered branch of the great Appalachian family, and are seen away to the west of the river, swelling up to a noble height, and lording it over the surrounding country. Every change of season, every change of weather, indeed, every hour of the day, produces some change in the magical hues and shapes of these mountains, and they are regarded by all the good wives, far and near, as perfect barometers. When the weather is fair and settled, they are clothed in blue and purple, and print their bold outlines on the clear evening sky, but, sometimes, when the rest of the landscape is cloudless, they will gather a hood of gray vapors about their summits, which,

6) Zandt も、ハドソン川流域に足を運んだ最初期の旅行者のひとりとしてアーヴィングの名前を挙げている。“One of the earliest visitors was Washington Irving, the first of America’s great men of letters. Irving made his initial trip up the Hudson as early as 1800,” Zandt, 157.

in the last rays of the setting sun, will glow and light up like a crown of glory.

(769)

この風景描写はさらにもう一段落続き、物語全体の分量からすれば不釣り合いなほど長い。しかし、アーヴィングのこの精細な自然描写は、この地域を取り巻いていた当時の状況と連動している。先述の通り、ハドソン川流域とキャツキル山脈は、観光地として人々の関心を集め始めていた場所であったからだ。「ハドソン川を船で遡ったことのある人なら誰でも、きっとキャツキル山脈を憶えているにちがいない」という書き出しは、ハドソン川を船で上り溪谷の自然美を愛でることが、すでに余暇として一般的なことになりつつあったという当時の状況を反映している。アーヴィングはその観光客／読者の存在を念頭に、この物語を語り始めている。この小説が出版されたのは1819年であるが、実際、その頃までには相当数の観光客が船でハドソン川を上っていたとされている（Gassan 78）。

余暇として旅行を楽しむということは19世紀以前にはヨーロッパにおいても貴族的な贅沢であり、アメリカでは19世紀になっても当初はほとんど存在しなかった。しかし、その後のアメリカにおけるツーリズムの発展は急速で、1830年代には一大ブームとなって社会を席卷する。ハドソン溪谷がアメリカにおいて初期の主要な観光地となった要因は、急速な経済的発展を遂げ人口集積地域となっていた大都市ニューヨークに近いという地理的条件と、ハドソン川の水路を移動の手段として容易に利用できるという利便性にあった。当初はスループと呼ばれる一本マストの帆船、それからほどなく登場した蒸気船に乗って人々はハドソン川を遡り、観光地へと足を運んだのである。

ハドソン溪谷におけるツーリズムの展開は、まず温泉地における保養から始まる。ハドソン川流域の最初の温泉保養地はBallston Spaで、続いて近隣のSaratoga Springsも温泉保養地として開発された。当初、人々がハドソン川を上りそれらの温泉地に足を運んだのは転地療養が目的であり、温泉の薬効を期待してのことであった。アメリカのツーリズム草創期において温泉地が目的地となっ

た背景には、やはりヨーロッパ文化の影響が色濃い。アメリカの温泉ツーリズムは、ヨーロッパにおいてローマ時代以来の長い歴史を有する温泉文化と、「水治療」(“hydropathy”)という物理療法を背景としていた(Gassan 13-15)。当時のアメリカは高い死亡率と疫病の蔓延に苦しめられていたが、温泉地で飲泉と沐浴に励むことは、有望な代替医療として人々の注目を集めていたのである(Sterngass 8)。

しかし、それらの温泉地の静かな空間は、“fashionable tourists”と呼ばれる一群の観光客の登場によって突如騒々しいものとなってゆく。上流、ないしは上流中産階級からなるこれらの観光客の目的は、転地療養といった代替医療目的ではなく、単に娯楽を求めるもので、主たる目的はお互いがその財力を競い合う顕示的消費にあり、温泉保養地は急速にその性質を変えてゆく。アーヴィングは、ハドソン川流域におけるツーリズムの展開に早い段階から注目しており、1807年には定期刊行雑誌、*Salmagundi*に、“Style at Ballston” (Thursday, October, 15, 1807)という記事を寄せ、この温泉地で進行した急速な俗化を嘆いている(Irving 286)。

温泉保養地が転地療養の場所から派手な社交場に転じる一方、ハドソン川流域においては、ハドソン川とその渓谷が織りなす美しい風景を楽しむ景観観光が拡がりを見せていた。ハドソン渓谷一体の自然美が観光資源であり、蒸気船乗船料の自由化⁷⁾も相俟って同地における観光は次第に大衆化し、多くの中流階級の人々が余暇として旅行を楽しむという文化が誕生する。先述の通り、「私自身のこと」の中でヨーロッパが有する歴史と文化的成熟というものがアメリカにはまったく欠如し、その若さだけが取り柄のようにアーヴィングは記しているが、実はその直前の段落において若さ以外にアメリカが持つ特質について語っている。

7) ハドソン川の蒸気船は、当初、Fulton Company とのちの North River Stream Navigation Company の独占事業であった。しかし、その独占を不当とする“Gibbons v. Ogden”事件が提訴され、1824年3月の最高裁判所はそれが不当競争にあたるとの画期的判決を下す。以降、蒸気船乗船料は自由競争の時代に突入し、低廉になったハドソン川の乗船料はツーリズムの大衆化を促進することとなる。ニューヨーク・アルバニー間の蒸気船乗船料は当初片道7ドルであったが、1830年には片道50セントと大幅な価格下落を見ている。Gassan, 91.

I visited various parts of my own country; and had I been merely a lover of fine scenery, I should have felt little desire to seek elsewhere its gratification, for on no country have the charms of nature been more prodigally lavished. Her mighty lakes, like oceans of liquid silver; her mountains, with their bright aerial tints; her valleys, teeming with wild fertility; her tremendous cataracts, thundering in their solitudes; her boundless plains, waving with spontaneous verdure; her broad deep rivers, rolling in solemn silence to the ocean; her trackless forests, where vegetation puts forth all its magnificence; her skies, kindling with the magic of summer clouds and glorious sunshine;—no, never need an American look beyond his own country for the sublime and beautiful of natural scenery.

(743-744)

無い無い尽くしのアメリカであっても、その雄大な自然景観は国の誇りであり、どこにも負けないとアーヴィングは言う。これはアーヴィングに限った思いではなく、19世紀初頭のアメリカ人は総じてアメリカの風景（landscape）に特別な感情を抱いていた。人々は、「自分たちが入植した土地との関係性に自分たちのアイデンティティを求め」（“they had sought their identity in their relationship to the land they had settled,” Sears 4）、自然景観こそはアメリカの「文化の根幹」（“the basis of that culture,” Ibid.）だと捉えていた。アメリカ人は、アメリカを「自然の国家」（“Nature’s nation,” Miller 242）と定義していたのである。文化的独立を模索していた19世紀前半のアメリカにおいて、ランドスケープ・ツーリズムは自国の自然に国家アイデンティティを見出そうとする人々の意識と共に発展した。そして、「リップ・ヴァン・ウインクル」をはじめとする文学作品と、ハドソン・リバー派と称される一群の画家たち⁸⁾によって描かれた風景画は、ハドソン川流域

8) “Hudson River School” という呼称は後年の1870年代になって当時の評論家によって作られた造語である。彼らはハドソン川流域を型どおりに描くそれらの風景画に批判的で、この造語

におけるツーリズムの商業的展開と関わり、その発展に大きく寄与したのである。

4. ツーリズムとアメリカの文化と芸術

ハドソン川流域における観光開発は急速に進み、1825年にはエリー運河が開通して、ついには「自然の国家」アメリカの最大の表象⁹⁾であるナイアガラの滝へのアクセスも容易となった。観光が発展するためには、何よりも観光地自体に独自の魅力が備わっていなければならないが、ハドソン渓谷から最終的にナイアガラの滝に至るニューヨーク北部ツアーのルートには、しばしばピクチャレスク (picturesque) やサブライム (sublime)¹⁰⁾ という美の概念で形容される自然美があふれていた。ハドソン川を航行する蒸気船の数が増え¹¹⁾、船体もより大きくなって大量輸送が可能 (Zandt 9) となり、さらにエリー運河開通によって交通利便性は飛躍的に向上した。そして、それぞれの観光地に快適な宿泊施設の整備が進むにつれて、ハドソン川流域はいよいよ観光地として充実していく。

ハドソン渓谷の西方に広がるキャツキル山脈においても、1824年に1つの瀟洒なホテルが開業する。ハドソン川を見下ろす山腹の Pine Orchard という場所に新たに建設された Catskill Mountain House である。岩棚に屹立し、ハドソン溪

には古臭い表現方法を軽蔑する意味合いがあった。(Kornhauser 14)

- 9) "Niagara Falls emerges as the American icon of the sublime in the early nineteenth century." Mckinsey, 3.
- 10) 自然景観の美しさを定義する picturesque と sublime という概念も、やはりヨーロッパから移入されたものである。"sublime" は、アイルランドの哲学者、Edmund Burke (1729-1797) が提唱した美の概念であるが、"beautiful" が比較的小規模で、なめらかで軽く繊細な美であるのに対し、"sublime" は壮大で人に畏怖の念を覚えさせるような美しさと定義された。"picturesque" は、"sublime" と "beautiful" の中間に位置する美の概念である。その名前通り絵画にするにふさわしい自然美を指すものであるが、対象物がただ美しいだけではなく、そこに何らかの荒々しさが包含されるものである。この美の概念は、イギリスの芸術家であった William Gilpin (1724-1804) によって提唱された。
- 11) 1840年頃までには、ハドソン川を航行する蒸気船の数は100艘近くに増えている。乗船料も安くなり、スピードも速くなったことでスループ船から多くの乗客を奪った。Zandt, 9.

谷を眼下に見下ろすこの壮麗なホテルには、その風光明媚さに魅了されて国内外から多くの名士が投宿した。このホテルが多くのツーリストにとって憧れの場所となったのは、なによりもハドソン溪谷のピクチャレスクな自然美を一望出来るその立地に魅力があったからだ。キャツキル・マウンテン・ハウス自体が宿泊施設として贅を尽くした当時の最高級のホテルであったことも大きい。19世紀前半のアメリカの宿泊施設はヨーロッパからの観光客には貧弱だとして総じて不評だったが、ブルゴーニュ・ワインやマデラ酒を取りそろえ、上質のフランス料理を供したキャツキル・マウンテン・ハウスは、洗練されたヨーロッパ水準のホテルとしてアメリカ人の誇りとなったのである（Sears 67-68）。アーヴィングと共に19世紀前半を代表する作家、James Fenimore Cooper (1789-1851) は、アメリカの大西洋側の重要な風景として3つの場所を挙げているが、ナイアガラの滝、ジョージ湖と並んで、自然景観ではない人工建造物のキャツキル・マウンテン・ハウスをその中に含め、ホテル自体を必見の観光名所として推奨している（Zandt 41）。そして、今や国民文学として抜群の人気を誇っていた「リップ・ヴァン・ウィンクル」は、ご当地の物語としてキャツキル・マウンテン・ハウスの集客力向上に一役買ったのである。

ニューヨークからハドソン川を蒸気船で上って、キャツキル山脈の麓の町、キャツキルに到着した観光客は、そこから馬車に乗り換えて急峻な山道を登り、一路キャツキル・マウンテン・ハウスを目指した。ホテルに向かうその沿道には、旅情をさらに高めるある仕掛けがすでに観光客を待ち構えていた。一行の馬車は、「リップ・ヴァン・ウィンクルの住居」（“Rip Van Winkle House”）とされる小屋と、不思議なオランダ人がナインピンズに興じている間、リップが彼らの酒をくすねて飲んだ窪地（“the hollow”）の跡を通ったのだ（Schuyler 26）。言うまでもなくそれらは虚構であるが、キャツキル山脈におけるツーリズムは、このあまりにも有名な「リップ・ヴァン・ウィンクル」という物語を商業化し、わざわざ沿路にリップの住居と称する小屋を建て、強力な宣伝手段として有効活用したのである。観光地が魅力的な場所であるためには、史実であれ、虚構であれ、観光客を引きつける何らかの物

語性がその地に存在しなければならない。「リップ・ヴァン・ウインクル」はその圧倒的な知名度によって、キャツキル山脈における観光発展に大いに寄与したのである。

しかし、ハドソン川流域での観光が発展してゆくにあたって、消費者であるツーリストに訴求力があつたのは、「リップ・ヴァン・ウインクル」という物語だけに限らない。1840年に発行¹²⁾された *The Scenery of the Catskill Mountains* は、キャツキル山脈に何らかの関わりを持つ文学作品やエッセイなどを15編集めた小冊子であるが、当時ひとつの観光地についてこれほど多くの文学者や画家、文化人が関与していたという事実は、ツーリズムがもたらした文化的インパクトがいかに大きいものであつたかを示している。「リップ・ヴァン・ウインクル」の全編、クーパーの冒険歴史小説『開拓者たち』(*The Pioneers*, 1823)からの抜粋、詩人のWilliam Cullen Bryant (1794-1878)による詩、当時の著名な文筆家であり敏腕編集者であつたN. P. Willis (1806-1867)のエッセイ、ハドソン・リバー派の画家、Thomas Cole (1801-1848)によるエッセイ、雑誌記事の引用なども散りばめて、この冊子は同地の魅力を最大限アピールするものとなっている。そして、もっとも興味深いことは、本編に先立って冊子の巻頭にキャツキル・マウンテン・ハウスの経営者であるチャールズ・ビーチ (Charles Beach) 自らが記す自分のホテルの宣伝ページがあるということだ。「皆様おなじみの当リゾートでは、素敵なご旅行のシーズンの間、お客様のお越しをお待ちしています」(“This well known resort is open for the reception of visitors [sic.] during the season of fashionable travel”)という見出しに続けて、ホテルの広さや造作を説明して快適であることを請け合い、ニューヨークやオルバニーからの交通アクセスの良さを強調する。有名作品を網羅したこの冊子は結局、ホテル外観のイラストまで載せたキャツキル・マウンテン・ハウスの宣伝パンフレットなのである。

このように当時のツーリズムは、有名な文学作品やエッセイ、絵画を観光地宣伝

12) 発行年はコーネル大学所蔵版による。同書には1843年発行のAmerican Antiquarian Society所蔵版もあるが、コーネル大学所蔵版と収録作品は変わらない。一方、エール大学所蔵版は1860年発行で、ページ数も多く、増補版だと思われる。

のために大いに利用したのだが、文学者や芸術家とツーリズムの関係性は互恵的でもあった。観光地を舞台とした小説や絵画がその場所の価値を高める一方、有名観光地を作品の舞台とすることで読者の目を引き、作品を手にとってもらえる可能性があったのである。特に19世紀前半の早い時期においては、作家たちはツーリストの存在を意識せざるをえなかった。旅行は依然として贅沢な趣味であり、参加者は中上流階級の人々に限られていたが、書物の値段もまだ比較的高価で、読書も高級な趣味であった。当時、本を買ったり旅行に出掛けたりするには相応の経済力が必要であり、旅行をする階層と読書をする階層は実は同じ階層の人々だったのだ（Gassan, 78）。従って、観光地を作品の舞台とすることはこの階層の人々に対する訴求効果が期待され、創作者側にとってそれはある種のマーケティング戦略でもあったのである。

フェニモア・クーパーの『モヒカン族最後の者』（*The Last of the Mohicans*, 1826）は、ハドソン川をさらに上ったジョージ湖周辺を作品の舞台としているが、この大河歴史小説によってさらに多くの観光客が同地に押し寄せるようになった。小説の舞台を自らの目で確かめてみたいという衝動は、読者誰しもが覚えるものだ。一方、有名観光地を物語の舞台としたことも手伝って、クーパーは多くの読者を獲得する。ツーリズムと文学の相互依存関係はここで終わらない。ハドソン・リバー派の開祖、トーマス・コールも、このツーリズムと文学作品の結びつきに新たに加わった。小説出版の翌年、コールはパトロンの依頼を受けて、『モヒカン族最後の者』の一場面を再現した *Scene from "The Last of the Mohicans," Cora Kneeling at the Feet of Tamemund* (1827) という絵画を描いたのである（Kornhauser 76）。

結び

作家や画家たちがツーリズムと関わりを持ったのは、それぞれの作品に対する人々の関心を集めたいという実利的な理由があったことは確かであろう。しかし、同時にハドソン川流域の観光地を舞台とする一連の絵画や文学作品が、文化的独立

を目指していた19世紀前半のアメリカにおいて、多かれ少なかれアメリカのナショナル・アイデンティティ確立に寄与したことは間違いない。場所を変え、テーマを変え、その後もツーリズムは19世紀前半のアメリカ北東部においてさらに展開していく。ハドソン川流域やナイアガラの滝が観光地として定着し大衆化する中、ハドソン渓谷以外の場所にも観光地の開拓が求められていたが、ニューハンプシャー州のホワイト山脈(White Mountains)が次に新たな観光地として脚光を浴びることになる。この観光地もまたサブライムな自然景観が本来の観光資源であったが、加えてここで起こった自然災害によって一気にその知名度が高まった。この場所で突如発生した大規模な地滑りによって、入植者一家全員の命が奪われたことが大きく報じられたのである。

1826年8月28日の夜、その地滑りはホワイト山脈のクロフォード・ノッチで発生し、入植者のウィリー一家と使用人の9人全員が巻き込まれて亡くなった。家族は地滑りの音を聞きつけ家から飛び出し逃れようとしたが、皮肉にも家は地滑りに巻き込まれず避難した先の小屋が土砂に飲み込まれてしまった。この悲劇的な要素もあってホワイト山脈のクロフォード・ノッチは一躍有名になり、ガイドブックといった商業的なものから文学作品に至るまで数多くの読み物でこの惨事¹³⁾は語られることとなった。ナイアガラの瀑布はその壮大なスケールで人々を圧倒したが、ホワイト山脈で起きたウィリー一家の惨事は、それとは別の形で、アメリカの大自然に内在するサブライムな要素を人々に改めて印象づけた。サブライムとは、それを見ている人に畏怖の念や恐怖すら感じさせる自然を指す美の概念なのである。

1832年、まだ駆け出しの作家であったナサニエル・ホーソーン(1804-1864)は、創作のヒントと題材を得るために北東部周遊の旅に出掛け、ホワイト山脈にも足

13) この惨事はしばしばピクチャレスクな画家たちのモチーフとなり、ガイドブックの著者もこの災害について大きなスペースを割くようになった。Gideon M. Davisonは、この地滑りがホワイト山脈の観光に及ぼした影響について、次のように述べている。

“The number of visitors to the White Mountains has been considerably increased, on account of the interest excited by these *avalanches*.” *The Fashionable Tour* (fourth edition), 339.

を伸ばしている。職業作家として生きていくことを決意していたホーソーンの目には、アーヴィングやクーパーなどの先輩作家が作品の舞台を観光地に据えることで成功を収めていたことは、追従すべき文学的なビジネス・モデルと映ったかも知れない。ホーソーンもまた、ホワイト山脈という当時脚光を浴びつつあった観光地を舞台としていくつかの短篇作品を著している。1835年6月号の *New England Magazine* に匿名で掲載された“The Ambitious Guest”は、このウィリー一家を襲った悲劇に着想を得たフィクションであった。そして、この作品はホワイト山脈のクロフォード・ノッチという観光地に物語性を付与し、観光案内で紹介され、今に至るまで多くの観光客をこの場所に引き寄せているのだ。

ピクチャレスクでサブライムな大自然の国、アメリカ。そのアイデンティティの根幹である大自然は、開拓の拡大によってアメリカから急速に失われつつあった。観光地の開発もまた自然破壊を伴うという内的矛盾を抱えていたが、ハドソン渓谷に展開したツーリズムは、文学や芸術と共鳴しつつ、アメリカの文化的アイデンティティの確立という試みと共にあったのである。

Works Cited

- Burke, Edmund. *A Philosophical Enquiry into the Origin of Our Ideas of the Sublime and Beautiful*. 1757. New York: Oxford UP, 2008. Print.
- Davison, Manor G. *The Fashionable Tour: A Guide to Travellers Visiting the Middle and Northern States, and the Province of Canada*. Fourth edition. Saratoga Springs: M. G. Davison, 1830. *HathiTrust*. Web. Oct. 4, 2013.
- Gassan, Richard H. *The Birth of American Tourism: New York, the Hudson Valley, and American Culture, 1790-1830*. Amherst: U of Massachusetts P, 2008. Print.
- Gilpin, William. *Three Essays: on Picturesque Beauty; on Picturesque Travel; and on Sketching Landscape*. 2nd ed. 1794. Gale ECCO, Print Editions, 2010. Print.
- Hawthorne, Nathaniel. “Ambitious Guest.” *Twice-Told Tales*. Ed. William Charvat et al. The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne.
- Irving, Pierre Munroe. *The Life and Letters of Washington Irving*. Vol. 3. New York: G.P. Putnam, 1864. *HathiTrust*. Web. Jan. 25, 2014.
- Irving, Washington. “Style at Ballston” (Thursday, October 15, 1807), *Salmagundi*.

- Ed. James W. Tuttleton. *Washington Irving: History, Tales, and Sketches*. New York: The Library of America, 1983. 286-291. Print.
- . “Rip Van Winkle.” *The Sketch Book of Geoffrey Crayon, Gent.* Ed. James W. Tuttleton. *Washington Irving: History, Tales, and Sketches*. New York: The Library of America, 1983. 769-785. Print.
- Jones, Brian Jay. *Washington Irving: The Definitive Biography of America's First Bestselling Author*. New York: Arcade Publishing, 2011. Print.
- Kornhauser, Elizabeth Mankin. “‘All Nature Here is New to Art’: Painting the American Landscape in the Nineteenth Century.” *Hudson River School: Masterworks from the Wadsworth Atheneum Museum of Art*. New Haven: Yale UP, 2003. Print.
- Mckinsey, Elizabeth. *Niagara Falls: Icon of the American Sublime*. Cambridge: Cambridge UP, 1985. Print.
- Miller, Perry. “The Romantic Dilemma in American Nationalism and the Concept of Nature.” *The Harvard Theological Review*, Vol. 48, No.4 (Oct., 1955): 239-253. *JSTOR*. Web. Dec. 15, 2013.
- Schuyler, David. “The Mid-Hudson Valley as Iconic Landscape: Tourism, Economic Development, and the Beginning of a Preservationist Impulse,” *Within the Landscape: Essays on Nineteenth-Century American Art and Culture*. Carlisle: The Trout Gallery, Dickinson College, 2005. 11-41. Print.
- Scudder, Horace Elisha. “Introduction to Rip Van Winkle,” *American Prose; Hawthorne: Irving: Longfellow: Whittier: Holmes: Lowell: Thoreau: Emerson*. Boston & New York: Houghton Mifflin Company, 1891: 93-94. *HathiTrust*. Sat. May. 3, 2014.
- Sears, John F. *Sacred Places: American Tourist Attractions in the Nineteenth Century*. 1989. Amherst: U of Massachusetts P, 1998. Print.
- Sterngass, Jon. *First Resorts: Pursuing Pleasure at Saratoga Springs, New Port & Coney Island*. Baltimore: The Johns Hopkins UP, 2001. Print.
- Zandt, Roland Van. *The Catskill Mountain House*. 1966. Hensonville: Black Dome Press, 2001. Print.